



串田、ステップスにおける二度目の個展である。今回、串田は通し番号を振った紙にアクリルの作品を 17 点出品した。その作品の総てが、全く異なる表情を浮かべている。色、筆跡、形、技法、発想、向き合い方、これほどまでに絵画とは多様に展開できるのかと驚く。

串田は果てしない探求を繰り返している。紙にアクリルで自在に描くことによって絵画が成立することを串田は実証する。しかしそれらの作品は、単なるバリエーションや



実験、器用貧乏に留まることはなく、一つの主張を背骨に持っている。その主張とは、ストロークが生み出す空間性である。

「空間」は彫刻や立体がその基盤を形成するのではない。立体視されるのは対象ではなく我々の視線の問題なのだ。それ故、絵画は空間性を描くことが任務とされた。東洋三遠、西洋遠近法がその最たる

例であろう。しかしそれらにある空間とは一線を画す、串田の空間には何かが存在する。

串田は今回の個展に、二つの動向が見られるという。「一つは画面上をオールオーバーに展開してせめぎ合わせていくものと、もう一つは画面を 2 つの違う色がせめぎ合って拮抗する間の中央にある要素を持ってきているものです」。串田の視線は何を追っているのだろうか。闘ぎ合いが制作の一つの鍵となるのだろうか、実際の画面には色彩と比率よりも空間が満ち溢れている。

すると、串田のストロークとは何かといった疑問が湧く。ストロークとは単に腕を動かす作業ではない。そこに滲みや量しを行う行為が含まれていても、串田のストロークは視線が伴わない。そして、視線しか残されていない。つまり、視線と腕の動きが均等にならないのに別々ではないという背理が存在するのだ。

このような特徴を持つ串田の作品にある空間とは、作品の内部ではなく外部に存在する。そのため、視線が外部に零れ、その外部に我々は絵画を見出すことが、やっと可能になるのだ。外部といっても絵画の縁の外ではない。我々が規定する外部の概念がそうさせるのだ。内部に描かれているものは虚像ではない。それもまた、絵画である。

